

二人の母

Leave It to Me 試論

小池理恵*

Two Mothers:

A Reading of Mukherjee's *Leave It to Me*

KOIKE Rie

Abstract

Leave It to Me is Mukherjee's last novel in the 20th century and the third of her American trilogy. This novel presents the idea and possibility of clarifying the initial "D" after emphasizing its destructive power. I will discuss *Leave It to Me* by showing Mukherjee's intention, her attitude of going beyond the limiting boundaries of the past—in the novel represented by the genes of the protagonist's bio-parents—. In the novel Mukherjee reveals the true meaning of the initial "D" as in "Destruction is Creation's necessary prelude." It may be true that there is no way to change one's past and genetic tie which seemingly restricts one's present and future nature and behavioral patterns.

Focusing on the words "clarity" and "justice," the initial "D" of the female protagonist Debby/Devi in the novel is hypothesized to be such a ferocious element that, for the purpose of exacting "justice" distinguished from "vengeance," will destroy something or someone who betrays her. Apparently this element has been partly inherited from her bio-father, a serial killer, Romeo Hawk. However, in fact, it must have come from the goddess Devi in Hindu legend, whose power is introduced in the prologue. In the novel Mukherjee suggests a chance and possibility to transform and clarify one's nature.

はじめに

2004年5月23日、カナダのラジオ番組に出演したパーラティ・ムカジー (Bharati Mukherjee 1940-) は次のような発言をしていた。「自分が育った家には鏡というものがなく、自分の顔を見たことがないが、祖母の顔あるいは母の顔を見れば自分の顔を想像できる位に自分たちは似ている。今の年齢になってみると殊更似ているので、今でも鏡を見なくても母の顔を見れば自分の顔が想像できる。」これは特にムカジーだけにいえることではない。娘とその母親が似ているのはごく自然のことだが、こうした発言の裏には自分が持って生まれたもの、あるいは生まれる前から受け継がれたもの (nature) と、その後「変貌」(transformation) するために必要な様々な要因や条件 (nurture) へのこだわりがあるように思われる。そしてそれは、インドに生まれな

* 富士常葉大学流通経済学部講師

がらどのようにしたらアメリカ人としてのアイデンティティ (identity) を獲得できるのか、また自分だけではなくアメリカ社会にもそれを認めさせること、つまり「相互の変貌」(“a two-way transformation” *Writers on America* 51) のためにはどのような作品を書いたらいいのか、というムカジーの創作活動の原動力ともなっているのではないだろうか¹。そしてこの「変貌」というテーマを発見したムカジーが、どれほど身軽になったか想像するに難くない。というのも、彼女は出生時にムカジー一家専属の占星術師に自分の運命というもの、死期までをも決められていたからだ。

S: May I ask when you will die?

M: Between July 27, 2003 and July 27, 2004, according to my horoscope.

S: How seriously do you take this?

M: Other pronouncements in my horoscope have come true. So, with the year of my foretold death approaching pretty fast, I realize I'm balancing both a Hindu way of computing important events in my life and the fact that I am in love with the American mythology that you make your future, you make your life.

S: Horoscopes have been important in your fiction. In *Desirable Daughters*, Tara's horoscope says she'll die 20 years before her husband.

M: And *Jasmine*, too, which is a novel about balancing a traditional Indian faith in destiny by an American immigrant who has broken with tradition in some ways by leaving the original culture—deliberately deracinating herself.

S: This sounds like a description of your life and your literature. You've done both.

M: Yes, yes, absolutely. Nevertheless, the first and last events—birth and death—for a Hindu, at least of my generation, are ruled by the horoscope. But the middle part of my life has been being an American, in the sense of pushing frontiers, making myself; it's been about desire, ambition, being my own guide. And now, suddenly, I have to wonder: Will it, my death foretold, really happen? (Schoch)

これはムカジーの家族にだけ特有なものではなく、ヒンドゥー教あるいはヒンドゥー文化においてはごく普通のことである。ヒンドゥー文化の中で育ち、生まれた時から運命は決定して変えることが不可能である、と考えるカーストの下位階級出身の契約労働者たちが、世界各地へ向けインドをあとにしたのも、インドでは生まれた時に決められた階級環境からは脱出できない、と信じられているからだ。

もちろんムカジー自身もそれを承知しており、その与えられた死期から脱出し、生き延びることなどヒンドゥー文化圏にあっては考えもしなかっただろう。しかし、アメリカに移住し、決められた星を動かすことができる、という考えにたどり着いたとしたらどうだろうか。そしてそのためには、アメリカ人としてのアイデンティティを獲得する必要がある、と考えられないだろう

か。ムカジーにとってアメリカで創作するという事は、アイデンティティを変え、運命を変える実験だと読むことができるのではないだろうか。不変であると信じてきた、決められた運命 (fixed fate) を変えることを、定着した考え方を変えることと重ねてみる。そのためには、想像力 (imagination) と創造力 (creation) が大いなる役割を演じる。つまり、ムカジーが移民世界をどのように認識しているのか、その認識方法と、その認識に基づく様々な事例を作品中で具体化することで、ムカジーは自分の個人的・主観的な認識としてのアイデンティティを、変動性のあるもの、可変なものとしてアメリカ社会に提示することができる。自身がアメリカ人となるばかりでなく、アメリカ社会が「(インド・ベンガル出身の) アメリカ人」(American of Indian/Bengali origin) というアイデンティティを受け入れてこそ初めて、生まれた時にすでに決められた固定された星を動かすことができるのだ。

ムカジーはアイデンティティが不変ではなく、可変であることを示すために「変貌」という概念を取り入れた。それは単なる理想への逃避ではなく、別の認識視点でアメリカ人を定義するという事である。自ら大いなる大陸をあとにし、不動とされたカースト制から跳び出し、不変であるとされている文化を離れた経験が作品に反映している。

ムカジーが最初の移民先である夫 (Clark Blaise) の故国カナダを離れ、アメリカを選択したのは、移民としての実際の経験や移民に対する両国民の差も要因となっているが、何よりもアメリカでは憲法において移民擁護が謳われ、移民もアメリカ人と同等の権利を主張することができるからだ²。つまり言い換えると、言葉による擁護を選択したともいえる。従ってムカジーの作品にも言葉による決定論を、言葉の解釈により覆そうとする意図が見られる。それがイニシャルの解釈へのこだわりであると考えられる。

1. ムカジーのアイデンティティ・ポリティックス

「アメリカ人作家」としてのムカジーの作品に見られる人間観・世界観は、カオス理論 (Chaos Theory) の用語を借用して一言で表現するならば、運命 = 初期条件であるといえる。初期条件とは「今日北京で蝶が羽ばたくと、来月ニューヨークでの嵐の発生に変化がおこる」と説明される蝶の羽ばたきにあたるものであり、このバタフライ効果 (the Butterfly Effect) はカオス理論の基本を成している。因果律と信じられている構造範囲の中にも、ほんの僅かなゆらぎが導入されれば、重大な構造的変質がもたらされると見る発想だ。別の角度から見ると、一見無秩序であるものの中に、目には見えないけれども規則的な関連性がある、という前提で究極的には予測不可能なものすら予測することを目指す。

ムカジーは主人公たちに (おそらくは自らにさえも) 与えられた運命・アイデンティティを、このゆらぎを利用し大きく変えようとする作家であると考えられる。初期条件の些細な解釈の相違を利用すれば、不変だと信じられてきた概念を変えることができる、という可能性の提示である。ムカジー自身、親が占星術で選んだ運命として受け入れるべき結婚相手ではなく、その運命を大きく変える相手を選択している。それに関して彼女自身は「予測可能な特権的生活よりも、予測不可能な人生を選びたかった」と語っている (『21世紀から見るアメリカ文学史 アメリカ

ニズムの変容』2003 p.161)。

20世紀後半から21世紀にかけて科学の分野では『やわらかな遺伝子』(リドレ・マツト 2004)などで紹介されているように「生まれか育ちか」(nature vs. nurture)の従来の2項対立の図式は打ち崩され、新しい人間観として遺伝子と環境がともに柔軟で相互に関係していることを社会政策にも反映させるといった考え方が提示されるようになってきた。ムカジーにとっても「生まれか育ちか」、「生まれはどれ程重要か」(how much nature/nurture?)という問いは、彼女自身が「インド・ベンガル出身のアメリカ人」というアイデンティティを獲得するために、必要な考察であるといえる。つまり、彼女にとってはアメリカ人=育ち(American=nurture)、インド・ベンガル出身=生まれ=運命(Indian/Bengali origin=nature=fate)という方式が成立する。

ムカジーは決して「アメリカ人」であることのみを主張しているわけではない。その根底には、初期条件である運命は完全に否定することはできないが、その解釈をほんの少しでも変化させることでゆらぎが生じ、自身のアイデンティティ、運命についてはアメリカ社会に大きな変化をもたらされる、という考えがあるように思われる。従ってムカジーにとってバタフライ効果は、「変貌」のためにこそ必要な概念である。つまりアイデンティティとその定義を変化させることで、運命をも変化させる試みである。アイデンティティを変え運命を変えるために、初期条件とバタフライ効果の概念は有効である。ムカジーのアイデンティティ・ポリティックス論を裏付けることができる科学的根拠として、またそれを作品に表現するための道具として、ヒンドゥー神話との調和がとれるのがカオス理論であるといえる。

2004年に出版されたエッセイ集(Wendy, *The Genius of Language*)でムカジーは継承した文化と新たに獲得した文化、二つの文化に関して興味深いことを述べている。

The inherited culture insists that accidents of impulse and geography have made homelessness my permanent condition; the adopted culture tries to persuade me that home is where I choose to invest love and loyalty. (14)

ムカジーが上記で指摘しているように、持って生まれた文化を手放したことで永久に根無し草になってしまうのか、新たに獲得した文化が故郷となりうるのかは、ムカジーに限らず移民たちの永遠のテーマである。

It's Bangla that exercises motherly restraint over my provisional, immigrant identity. Mother-Bangla is fixed; (11)

[A] second language, a school language, was necessary to liberate their minds from their bodies, their self from their community. (23)

母国語であるバングラ(Bangla)が、彼女の語りの根幹である一方で、自分たちのような移民

の心を自由に解き放つためには母国語以外の言語の介入が必要なのである。

The fluid concept of time inherited through Bangla's use of *kal* and the "magic realism" inherited from the Hindu epics inform my writing about immigrants in North American cities. (23)

このようにムカジーの描くアメリカの移民の変貌には、母国語から受け継いだ「時」の概念と、ヒンドゥー神話の「神秘的リアリズム」が導入され援用されていることは否めない。持って生まれたものとしての創造性を活かしながらアメリカを描くことが、ムカジーの作風であるといえる。

2. アメリカ3部作

ムカジーの作品、特にインド・ベンガル出身の「アメリカ人作家」として書かれた三小説には共通して「変貌」へのこだわりが表現されている。それは彼女自身がインタビューで次のように述べていることから明らかである。

Jasmine (1989), *The Holder of the World* (1993) and *Leave It to Me*, constitute, in her view, a trilogy of "first contact novels" that probe "the politics of identity." (Basbanes 2)

上記でムカジー自身が指摘している三作品は、移民が最初に異文化に触れた際のアイデンティティの揺らぎを表現した小説であり、移民の一方的な変貌からアメリカ社会をも変えようとする「相互の変貌」へとそのテーマはすすめられていく。

『ジャスミン』(*Jasmine*)では、主人公の名前がJyoti - Jasmine - Jazzy - Jase (Jassy) - Jane - Jasmineと変化し、それに伴ってそれぞれの名前が持つ意味も変わっていく³。その変化しつづける名前とアイデンティティがそれぞれのエピソードを持ち、その中に一つの原因と結果という論理的な関係が成立する。「J」という共通の頭文字を持つ名前が、変化の中の秩序を表している。時間から全く自由にジグザグに構成されているにもかかわらず、主人公は時間と空間を移動しながらも、“No!”という運命を否定する叫びが、最後に「竜巻」(tornado)となる線で結ぶことができるように構成されている。変化する名前のイニシャルに、共通して使用される「J」は「ジュール」(Joule)というエネルギーの単位を表す頭文字であり、ジャスミンの変貌に必要なエネルギーを表しているといえよう。「竜巻」はアメリカ社会を変える可能性の比喩であると解釈できる。

タイトルと同名の主人公ジャスミンは、インドの貧しい村に生まれ、そこで言い渡された「未亡人と亡命」(widowhood and exile)という二つの運命を否定する性質(nature)を持ち合わせていた。それが“No!”という否定の叫びで表現されているが、そのネガティブな叫びが、アメリカと最初に接触することでポジティブに開花する。アメリカへの移住の夢を実現できないままテロの犠牲となった夫の死を機会に、自殺を考えアメリカに密入国する。その日に、密入国船の

船長 (Half-Face) にレイプされるが、自らを女神カリ (Kali) に見立てレイプ犯を殺害する。ジャズミンがアメリカに着くと同時に起こるこの出来事は、自殺というネガティブな目的を否定し、自らアメリカ人としてのアイデンティティを獲得する、というポジティブな目的に生まれ変わる。「J」というイニシャルは、生まれ故郷から、そしてアメリカ人となる前に滞在していたカナダから、物理的にも精神的にも離れるために必要なムカジー自身のエネルギーとしても解釈できる。

『世界の保持者』(*The Holder of the World*) では、歴史の書き換えにより運命を変えること、つまり「A」というイニシャルの解釈を根本的に変えることで、アメリカの歴史を再構築する可能性が提示されている。かつてナサニエル・ホーソン (Nathaniel Hawthorne 1804-1864) が描いた『緋文字』(*Scarlet Letter* 1850) の「A」が表象する「Adultery」とは異なる「Act」の「A」である。ホーソンの描いている歴史を1650年代の過去へとさかのぼり、「A」の解釈を変えることで、再構築する試みであるといえる。現代に生きる「お宝ハンター」(asset hunter) という仕事をしている主人公 (Beigh) のもとに、顧客の依頼がくる。それは「皇帝の涙」(Emperor's Tear) とよばれる歴史上貴重なダイヤモンドを探すことである。その過程で、自分の先祖にハナ (Hannah) という女性がいて、その女性がこのダイヤモンドと深い関係があることを知る。異なる時代に生きたこの二人の主人公たちが、彼女たちに関連したイニシャルが持つ規則性によって繋がっている。そして「A」に限らず、それに続くイニシャルの解釈にも関連性を持たせている。主人公の交際相手のイニシャル (Andrew, Blake, Chase, Devon, Gavin and Giles) を、ハナの行動の規範となるイニシャル (Act, Boldness, Character, Dissent, Ecstasy, Forage) に重ねている。それはホーソンのどちらかというネガティブなイニシャルの捉え方 (Adultery, Blasphemy, Drunkennes, Forgery) とは全く別の捉え方である。それは、それぞれの主人公が象徴として身につけたイニシャルについてもいえることである。ホーソンがアメリカの「A」を利用したと仮定すると、ムカジーはインド生まれの「I」という頭文字を利用したといえる。そして、ハナの母は「インドの恋人」(Indian Lover) として身に付けたが、ハナは「自立」(Independence) のイニシャルとして捉え直している。このように、同じイニシャルでも解釈の相違が生じる。そこからムカジーは別の歴史を提示している⁴。

『わたしのためにとっておいて』(*Leave It to Me*) はベトナム戦争に起因するヒッピー文化の遺産ともいえるアメリカ人とアジア人の間に産み落とされた孤児が主人公である。主人公は自身の生い立ちに疑問を抱き、今の自分は嘘の自分であると確信し、自分を置いてきぼりにした生みの母を探す決意をする。母を探し出し遺伝的な繋がり (Genetic Tie) を確認し、同時にそれを敢えて切断することで新たなアイデンティティを創造することができる。

I made up my mind to find out if I was someone special or just another misfit. ... I began to understand about mugged identities. There was something to nature over nurture, and to the tyranny of genes. (16)

言い換えるとエピローグで引用されている「瞬き (wink) による星 (Stars) の移動」がこの作

品の中心テーマであるといえる。まさに運命の星の位置を変える可能性の提示である。

バタフライ効果における初期条件のメタファーが、ムカジーのアメリカ三部作では名前の変化とイニシャルの解釈という形で表現されている。本稿では、『わたしのためにとっておいて』を中心に考察し、前二作『ジャスミン』と『世界の保持者』と同様に名前と頭文字が表象するものを探り、それによってムカジーが運命やアイデンティティをどう変えようとしているのかを提示する。

サンフランシスコで有名な実在の探偵デイヴィッド・フェッチハイマー (David Fetchheimer) にその献辞を捧げているこの作品は探偵小説としても読むことが出来る。

For David Fetchheimer, unraveler of myth and mystery

この献辞において「神話」(myth)は女神デヴィの神話を、「ミステリー」(mystery)は「生みの母」を探し出そうとする主人公の探偵としてのミステリーをそれぞれ暗示しているといえよう。

この小説の主人公(語り手)である養女デビー (Debby/Devi)も、前二作と同様、複雑に設定された人物である。生後間もなくインドの辺境にある砂漠に捨てられる。修道院で孤児として育った彼女は、イタリア系アメリカ人家族に養女として引き取られるが、成長するにつれて養父母とは異なる容姿になり、そこは自分の本来所属すべき場所ではない、と感じるようになる。こうして23歳で特に不自由のなかった養女としての生活に「非属感」(foreignness)を抱き、今の自分は嘘だと考え、自身の中に何かある繋がりを求め、自分を置き去りにした生物学上の両親を探す決意をする。探し当てた母親は主人公の目の前で、父親により復讐のために殺害され、その殺人犯の父を自ら手にかけるところでこの小説は終わる。

この作品では、『ジャスミン』と『世界の保持者』ではほとんど書かれていない両親(生物学上の父母と養父母)との関係に重点が置かれている。アメリカ人作家として出発したムカジーはまず、インドの貧しい村からアメリカへ不法入国し、そこでの変貌を重視した『ジャスミン』を書き、つづいてアメリカとインドの歴史上の接点を利用し、これまでアメリカ小説で取り上げられてきた歴史を書き換えることに重点を置く『世界の保持者』を創作した。そして前二作の延長上にある『わたしのためにとっておいて』は、『望ましき娘たち』(Desirable Daughters 2002)と『木の花嫁』(Tree Bride 2004)で展開されるに至る、故国インドにおける家族との関係(nature)を重視した自伝的作品へ向かう過渡期に位置付けられている、といえるだろう。特に血の繋がった父親を自らの手で殺害することに込められた、「遺伝的つながり」(genetic tie)を断ち切るこの意味、その後ヒンドゥーの女神デヴィの使命を受け継ぐこの意味が、イニシャル「D」に込められていると考えられる。『ジャスミン』での物理的なエネルギーの援用から生物学的遺伝子の考察への移行は、ムカジー自身がもはや移民としてではなく、生まれ変わったアメリカ人として自分のルーツを振り返る過渡期にあることを意味していると考えられる。

3. イニシャル「D」が持つ意味

この小説でもやはりイニシャルへのこだわりが見られる。それは主人公の名前に使用されている「D」である。主人公の名前の頭文字「D」が持つ意味は、「新たな創造へ向けての必要な前奏」としての「破壊」(Destruction is Creation's necessary prelude 211)であると想定できる。つまり、主人公が新しいアイデンティティを獲得するために必要な「破壊」(destruction/violence/murder)であるということだ。何かを壊さなければ新たなものは獲得できない。ヒンドゥー神話には、人生において必要な「破壊」に関する記述がある。以下はイアン・スチュアート (Ian Stewart) がその著書『カオスの世界像 非線形の理論から複雑系の科学へ』(Does God Play Dice? —The Mathematics of Chaos—)の「ヒンズー教におけるメンテナンス技法」(“Hinduism and the Art of Mechanical Maintenance”)の章で述べていることである。

In classical Hindu mythology the cosmos passes through three major phases: creation, maintenance, and destruction—mirroring birth, life, and death. Brahma is the god of creation, Vishnu the god of maintenance (order), and Shiva the god of destruction (disorder) (22)

同様な概念が小説のプロローグでは以下のように説明されている。

They know that the Cosmic Spirit (assuming the appearance of gods) continually makes, unmakes and remakes the world they live in. They know that it also created goddess Devi and endowed her with the will to save and the strength to kill, and it charged her with the mission of slaying the Buffalo Demon who had usurped the throne in the kingdom of heavenly beings. (5)

[T]he Cosmic Spirit will smile on its daughter-goddess, then go back to creating, preserving, breaking and re-creating the cosmos as always. (6)

またこの小説はエピローグと同じところから始まっている。それは「ラスト・チャンス」という船で、主人公と生みの母ジェス (Jess) が、ともに愛した相手であるハム (Ham) の死体を抱きしめながら、ことの起こりを振り返るという設定である。プロローグで明かされた女神デヴィの神話は、次なる正義のための戦いに備え、剣を収めたところで終わっているが、この繰り返しこそがヒンドゥー神話のメンテナンスである。つまり、ヒンドゥー神話に表現される宇宙こそムカジーが新たなアイデンティティを獲得するのに必要な概念を含んでいるということである。更にそこに描かれている宇宙は、イアン・スチュアートが説明しているように「カオスが秩序に道を譲り、つづいてこれがカオスの新たな形態を作り上げていく」(『カオスの世界像』7)という

ように決して同じ道は通らない螺旋的な循環を繰り返す宇宙である。

「必要な前奏」(necessary prelude)というフレーズに関しては、この小説では「必要性」が強調されている。そしてそれは、デビーの「破壊性」を引き出したアジア系のフランキー (Frankie) によって指摘される、アジア人とアメリカ人の根本的な相違の中に示されている、アメリカ人の「欲望」(wants) に対するアジア人の「必要」(need) である。

There are only two categories of people, those with *wants*, and those with *needs*. (36)

アメリカ人は前者でアジア人は後者である。そして「必要」は生来 (nature) からのものであり、「欲望」は必要が満たされた上で後から生じるもの (nurture) と結びついている。「生物学上の父」(bio-father) がアジア人であるので、必然的に主人公にはアジア人の血が受け継がれているということになる。その上、その「破壊」の性質は連続殺人犯として投獄されている父 (Dad) から、遺伝的に受け継がれたものであるとも考えることが出来る。従ってアメリカ人家庭で育てられた養女デビー (Debby) の「破壊」は「欲望」に近く、デヴィ (Devi) に変貌することにより、「破壊」(murder) は「必要」な要素となり、その理由も単なる「復讐」(vengeance) から女神デヴィの本来の使命である「正義のための制裁」(justice) となる。このことに関してムカジー自身インタビューで次のように説明している。

Devi came to me as the opposite of a character I'd written earlier, Jasmine from the novel *Jasmine*. ... [T]he most important idea ... was that [Devi] prizes clarity over everything else. What she understands, in retrospect, is that there's a huge difference between vengeance and justice. (Hogan 1)

彼女は「生まれつきの力」(Force of nature 230) としての「暴力的な傾向」(violent propensities 232) を備えており、それが「破壊」の原動力ともなっている。その力は、養女デビー時代にもデヴィに変貌してからも共通に現れるが、そこには明確な違いがあるということだ。

Debby vs. Devi

ムカジーはこの作品でも『ジャスミン』と同様に名前を変えることにより生まれ変わり (reincarnation, rebirth) 別の人生を生きる可能性を提示している。

He didn't realize that a few of us are given chance after chance because we have life after life to get it right. (45)

しかしながら、カリフォルニアに場所を移した後でも、デヴィに変貌する前と全く同じではないが、螺旋的な循環を繰り返しているといえる。その顕著な例は、出会う男性に見られる。

二人の母

A lot of people reminded of people I'd known, like we'd all drifted west till we'd run out of land, and then'd started to mutate a little ... (71)

特にゲイブ (Gabe) はワイアットに (looked like Wyatt, and kind of talked like Wyatt, too 71)、ハムはフランキーと (A rip-off of Flash's Boss Tong of Hong Kong 78) 類似する点が見られる。それは、変貌したはずのデビー/デヴィにもいえることである。ただ、同じ暴力的な性質を持ち合わせているが、その暴力を行使する理由が復讐と正義というように全く同じではないのである。その理由を明確にするために、母から受け継がなければならないものがある。それは母親の名前に表されている「明確さ」である。

この作品の主人公は養女デビー・ディマルティノ (Debby DiMartino) として登場し、デヴィ・ディ (Devi Dee) に名前を変えるが、その名前の変遷をたどると、Baby Clear Water Iris-Daughter, そしてFaustine (“typhoon”, “fury nature” 41; 88; 125) となる。

Next time we came with Faustine, and more cigarettes. That was the name we gave, we named our orphans like typhoons, Adele, Bela, Catherine... she was our sixth that year, such a pretty little imp. (125)

ヒッピーの女性から生まれた赤ん坊であり、母のヒッピー名であるアイリスは、虹とゼウスの使いを意味する女神の名前である。ある意味では、母はその名前が意味するように、殺人鬼であるかつての恋人ロメオを警察に通報するという使いの役を果たしている。そして母の名前の“Clear”という部分は、全ての疑惑をClarify (明らかにする、清浄にする) する使命として、デヴィに受け継がれている。この「明確にする」ことへのこだわりは、あるエピソードにも表現されている。それは、同じアパートの台所を共有しているソマリア人の夫が、自分の妻が移民局の人間にされた仕打ちに対して恨みを述べるが、デヴィは「恨みの対象が明確であることが羨ましい」 (“I envy the clarity of your hate.” 190) と「明確さ」を羨むコメントをする。

その後、修道院に保護されるが、その年6番目の孤児であったことからアルファベットの六番目の文字である「F」で始まる名前をつけられる。そして、イタリア系アメリカ人家族に養女デビーとして受け入れられる。養女としての名前は、養母のお気に入りの女優にちなんで名づけられた (“after Debbie Reynolds all-time favorite” 41)。しかし、その名前には別の意味も込められている。それは、デボラ (Deborah) の異形で、旧約聖書では預言者として登場する。預言者としてのデビーが次のデヴィという名前を本能的に決定したとも考えられる。養女デビーがデヴィに変貌するきっかけとなるのはカリフォルニアに差し掛かった時のことである。

Debby DiMartino died and Devi Dee birthed herself on the Donner Pass at the precise moment a top-down Spider Veloce with DEVI vanities (driver's blond hair billowing around a clamp of expensive speakers, cigarette cueing imaginary music) cut me off in

front of the Welcome to California Fruit Inspection Barrier to take the only open slot. (62)

自分の前を走る車のナンバープレートに記載されていたが、このデヴィという名前は決して偶然につけられたわけではない。デヴィという名前に関しては、自らも改名した経験のある占い師バルーナ (Varuna) が次のように説明している。

“Devi is not a name to find and choose. It has to find you.” ... “Devi is the female gender of Deva,” Ma Varuna went on. ... “But you are trailing no aura of light. ... ‘Deva’ comes from the Sanskrit word ‘shine.’ You are not a shiny woman.” (204)

バルーナの解釈が正しいかどうかは別として、デヴィがヒンドゥー教・文化圏では特別な名前であることは間違いない。そしてついに自分の中での二つの自己、デビーとデヴィが戦うことになるが、その戦いではデヴィが勝利し、「神秘的な遺伝子」を受け継ぎ養父母と別れを告げることになる。この「神秘的な遺伝子」とは、自分が感謝を捧げている母、ここでの名前は“ Clear Water ” のみの表記であり、特にここで強調したいことは、母の「明確にする」力とアジア人の父の暴力的な力であるといえる。

Devi arm-wrestled Debby. I was quicker, stronger as Devi; my intuitions were sharper, my impulsiveness rowdier. As Devi, I came into possession of my mystery genes. Thank you, Clear Water. And you, too, thank you, “Asian National.”

And thank you, Baby Fong, and what the heck, Frankie, too, for forcing me to deal with my not being a real DiMartino. ... [The Golden State] offered immunity from past and future sins. Goodbye, Debby DiMartino. Long live Devi Dee. (64-65)

デヴィはプロローグで紹介されているヒンドゥー神話の女神デヴィを意図しており、ディーは養父母の姓ディマルティノの頭文字をとって音表記したものであると考えられるが、*O.E.D.*によると、献辞を捧げたデイヴィッドの職業である探偵をも指していると考えられる。

3. Slang aggrev. Of Detective *n.* CF. D III. 3.

1882 *Sydney Slang Dict.* 3/2 *Dee* (D.), a detective policeman. ... 1949 E. DE Mauny *Huntsman in Career* 127 You’ve got to look out, if the dees come.

デビー/デヴィはその変貌の過程で、複数の男性と関わることになる。養女時代には、彼女が「養女である」ことを殊更に指摘し、遺伝的要素について関心を起こさせる役であるワイアット (Wyatt)、アジアとの関連性を見出すきっかけを作った中華系の男性フランキー・フォン (Frankie Fong)。そしてデヴィと改名してからは、ラリー (Loco Larry)、フレッド (Fred

Pointer)、そしてハム(Ham Cohan)である。養女デビーとしての「破壊」の力は、フランキーとの交際が破局を迎える際に、彼の裏切りに対しての「復讐」という形で現れる。彼の住居に放火してしまうが、それは彼女自身が「破壊」する性質を持ち合わせているのだ、ということを確認するために必要な出来事だった。上記の引用部分に、実の父母に対する謝辞の後、フランキーへの感謝の言葉が述べられているが、それは自分の性質を認識させてくれたことへの謝辞と考えられる。フランキーは特に、彼女の破壊性を引き出したという点で重要な人物である。しかしこの時点では、養女デビーとして、あくまでも裏切りへの「復讐」としての「破壊」であるといえる。

デヴィとしての最初の「破壊」(殺人)は、ラリーに対してであるが、この時はすでに「正義」の実現として殺害する。

The moon was a pale scar in the sky's star-pocked face. ... When I opened my eyes again, Larry was racing down the rise to where the two corpses lay; ... he hacked a thumb and a toe off Beth, who didn't have a head left to ravage, ...

That's when I shot [Larry]. That's why I shot him. The why and when of that moment are joined like Siamese twins.

Each of us has two brains, one in the gut and one in the skull. ... My skull-brain must have asked the why the very moment that my gut-brain was shouting the when. (173)

ベスを殺害したラリーに対してとっさに「正義の制裁」を下すのである。

その後デヴィは、「(生みの)母」(Jess)が、かつての恋人でありデヴィにとっては父であるロメオ(Romeo)を裏切り、警察に通報したことがあると知る。母の父に対する裏切りを知ったデヴィは、復讐の手助けとして、ロメオをジェスの居場所へ案内するのである。最後の場面で、ロメオは、ジェスとその恋人ハムを殺害し復讐を遂げる。ハムはデヴィにとっても恋人であり、「名前の重要さ」(“Names count.” 78)を教えてくれた人物でもある。ロメオは、かつて自分を裏切ったジェスを殺害しただけでなく、デヴィが好意をよせていたハムをも殺害してしまう。この場面で、デヴィは父であるロメオを殺害することになるが、ここで注目すべきことは、殺害の前に、乗船している「ラスト・チャンス」(Last Chance)という船が波で大きく揺れることである。大波は自然の破壊的なエネルギーを象徴していると同時に、その揺れを契機にデヴィは、父であるロメオを、正義のために殺害するための破壊的な性質を、女神デヴィから受け継ぐことになる。父を殺害するまでの破壊の力は、まさに父からの遺伝的要因であると考えられる。

ロメオはプロローグの神話で、残忍な力を持ち合わせたバッファロー・デーモン(Buffalo Demon)と同じ役割を演じていると想定できる。同じ破壊の力を表象する「D」をイニシャルにもった女神DeviとDemonとの戦いでは、Deviが正義の制裁を下し勝利する。ここではデヴィがジェスとハムを殺害した殺人犯ロメオに正義を示すのである。

Violent propensities. The sea has them, the Earth rocks with them. I claim my inheritance, kneeling Bio-Dad so hard ... that it tumbles him. (235)

O.E.D.によると「D」はアルファベットの4番目の文字であり、「死んだ」(dead)または「見捨てられた」(deserted)を意味することもあるイニシャルである(*Complete Book Adm. Smyth*)。しかしこの小説では、「D」はあくまでも新たな創造へ向けての「破壊」を表すイニシャルとして機能している。

Bio-momとBio-Dadの真実

デビーは、自分の生みの母がかつてフレスノのヒッピーであり、父は「欧亜混血の色男」(Eurasian lover boy 41)という最小限の情報は養母から入手していた。母と思われる人物、ジェス・ドゥプリー(Jess DuPree)が初めて登場するのは、ハムの電話の相手としてである。その時ジェスは「デヴィ」という名前と、インドとの関係に執拗にこだわるが、その後、実の母ジェスはハムから紹介されデヴィの前に姿を現すことになる。

Ham introduced the woman as Jess DuPree, the Jess of media escort agency Leave It to ME, didn't I remember him calling her that first time I stopped by his office? ... "ME," Jess said. "Media Escort, get the pun?" (113)

ここはこの小説のタイトルの由来が明かされている箇所でもある。デヴィは本当の自分を探すために、養女時代の名前を変え、カリフォルニアにやって来た。しかし彼女が就いた仕事は、電話アンケートとメディア・エスコート(ME)であり、自分自身の名前やアイデンティティといったことに全く関与しない仕事である。それはデヴィが全く何もないゼロからのアイデンティティ構築を考えているからだといえる。

When you inherit nothing, you are entitled to everything; that's the Devi Dee philosophy. (67)

ジェスという名前であるが、そこには「裏切り者」の意味が隠されている。語源はヘブライ語の Jessica で、原義は「神は見給う」。シェークスピア(Shakespeare)が『ベニスの商人』(*Merchant of Venice*)でキリスト教徒の恋人と駆け落ちするユダヤ人の娘にこの名前を与えていることからわかるように、ユダヤ人社会では裏切り者の名として好まれない名前である。また、非ユダヤ社会ではユダヤ的な名前と考えられ、アメリカではほとんど使われない。(『アメリカ人名辞典』1979北星堂書店p.182)この名前が暗示するように、彼女はかつての恋人ロメオを裏切っていた。

二人の母

“[T]he sins of my youth have come back to haunt me big time,” she said.

I know about the blackmailer, Jess. (186)

ジェス（母）がロメオ（父）を裏切り密告したことを知ったデヴィは、ロメオにジェスの居場所を教える。最後にジェスはロメオと再会するが、彼からはペチュニア（Petunia）と呼ばれていたことが明らかになる。

ロメオ・ホーク（Romeo Hawk 123）という名前に関しては、彼が初めてデヴィの前に現れた時に、その名前が彼の性質をいかに上手く表現しているかがわかる。

I drove him because he was the scatter of seeds from which I'd sprouted. (216)

彼には複数の女性がいて、おそらくは自分以外にも子供がいるであろうことは、上記引用からも容易に推測できる。O.E.D.によると、Romeoという名はいわゆる「プレーボーイの代名詞」であり、以下の定義がある⁵。

1. A lover, a passionate admirer; a seducer, a habitual pursuer of women

またHawkに関しては、一般的に「鷹」を意味し、攻撃的な性格であると考えられるが、O.E.D.によると次のように定義されている。

hawk *n.1* 3. *fig*

Applied to a person, in various senses derived from the nature of the bird of prey, e.g. one who preys on others, a rapacious person, a sharper or cheat; one who is keen and grasping; an officer of the law who pounces on criminals

つまり、「他人を食いものにする貪欲な人間」を意味している。まさにホークはヒッピーの女性たちを食いものにし、自分を裏切ったジェスに復讐するため、執拗に彼女を追いまわすのである。更にホークの詳細は以下の説明にある。

[T]he original transliteration of ... surname was H-a-q, ... a familiar Muslim nomenclature. H-a-w-k was the invention of Catholic nuns in Saigon ... in the absence of birth certificates of mother and son, questions of race, ethnicity, et cetera, are lacking evidentiary confirmation. ... the East has played a greater part than the West in the life and character formation of Romeo Hawk. (180-181)

ロメオ・ホークの出生もまた、デヴィと同様に明確な証明ができないが、その性格形成には「東洋」が大いに関わっている。

デヴィは自分の容姿について父親譲りであることを認めつつ (I got my good looks from him, and my fantastic good luck. 124)、一方ではジェスとの類似をも認めようとしている (Jess should be my double, not my rival. 130)。こうしてデビーであることを辞め、デヴィとしてのアイデンティティをジェスとロメオとの関係において探そうとし、多くの点で遺伝的にまた因縁的につながりがあることがわかる。ジェスと同じ男性に好意を寄せ、同じ仕事に就く。暴力的な性質はロメオから譲り受けたもので、最後には同じ凶器で殺人を犯すことになる。ジェスの口から初めてロメオの話を書く場面で、デヴィはロメオのことを悪魔 (敵) であると感じる。

“You had to have been there, Devi! There’s no describing that erotic moment.”

My beginning, I thought. I’ve just heard my beginning. ...

I saw what Jess’d felt. My father-her god, my devil-rocked her in his arms. (155)

それは彼女自身がロメオの犠牲者であるからだ (One of his early victims, in fact, was his baby daughter. In other words, you. 121)。ロメオ自身は遺伝的つながりを信じている (I always say genes will win out. 217)。これらの類似点は、彼女が自分で求めたものだろうか、それとも遺伝的に受け継がれたものだろうか。それはこの物語の最初の部分で、主人公が自分自身に投げかけている問いに答えることにもなる：「母たちがしたことを除いて、一体私は何をしたのだろうか？」

4 . 二人の母 (Mothers)

第一部の冒頭で主人公は2人の母の存在を暗示している。

What have I done but what my mothers did? The one who gave me birth, and the one I am just beginning to claim. (9)

ここだけに注目すると2人の母のうち一人は生みの母、もう一人は育ての母のように思われる。しかし、更に続く箇所では、

My mothers, luminous as dewdrops in dawnlight, weightless as the wings of a newborn dragonfly, float towards me from the place where I was born. (9)

まだ会ったことのない2人の母については、主人公の生まれた場所からそのイメージが湧出してくると解釈できる。つまり、インドの村デヴィガオン (Devigaon) である。そこは歴史が語られるずっと以前から (before the “long ago” 5)、女神デヴィ (The Earth Mother and Warrior Goddess 6) の伝説が語り継がれている場所でもある。プロローグで語られている正義のための破壊は女神デヴィの使命である。従って主人公のもう一人の母は女神デヴィであるといえるだろ

う。

デビーにかすかに残る記憶には2種類あり、そのうちの一つが星とダンスをしているもので、これは明らかに彼女の性質にはプロローグで紹介された女神デヴィと関わるものがあることを示唆している。

I have no clear memory of my birthplace, only of the whiteness of its sun, the harshness of its hills, the raspy moan of its desert winds, the desperate suddenness of its twilight: these I see like the pattern of veins on the insides of my eyelids. (9)

But there's another part I try to keep secret, the part that sings to moons and dances with stars. It's just that Debby DiMartino has no weight, no substance. (10)

『わたしのためにとっておいて』というタイトルが示すように、養子としての存在を否定し、生みの母と父を捜すストーリーは、自分が本当に受け継いだもの (nature) を確認し、獲得するストーリーであるともいえる。女神デヴィのnatureを受け継ぐために、両親 (bio-parents) から獲得したnurtureを利用していると考えられる。Deviのアイデンティティの根幹である「D」を規定している全ての要素 (natureとnurture) が必要なのである。

TOE

ムカジーのアイデンティティ獲得への方程式はエピローグに次のように示されている。

Physicists and fantasists suspect that someday there will be one simple equation to express and explain all the problems of all the galaxies. My big toe, ... , is also the TOE: the Theory of Everything. (239)

「私の大きなつま先」 (my big toe : 小文字) が物理的にデヴィの「大きなつま先」を表すのではなく、大文字 (big lettered TOE) を意味するとすれば、「万物理論」 (TOE = Theory Of Everything) とも解釈することが可能である。こうしてムカジーは言葉により決定された意味を言葉により置き換え、そうすることによってアイデンティティの置き換えを行っている。

ムカジーは『ジャスミン』以来、「(インド・ベンガル出身の) アメリカ人としてのアイデンティティ」を一つの決められた塊としてではなく、様々な要素のからまりとしてとして描いてきた。解きたい移民のアイデンティティの複雑さを、あらゆる出来事を引き起こすに至る様々な異質の要素の存在を示すことによって描いてきた。特にイニシャルの一つ一つから出発し広がってゆく由来、科学的要素、歴史文化的要素を小説の題材として使用可能にした。それが事実であれ可能性であれ過去であれ、未来との関連性を見出だせるよう配置している。そのための知的要素としての科学、カオス理論への言及があった。移民のアイデンティティの不安定さをどのように結

論づけるのか、その不可能さゆえに、多様性自体がアイデンティティとなりうる。あらゆるものを結びつけている網の目自体が、ムカジーのテーマである。アメリカ人としてのアイデンティティはもはや「変貌」でしか表現できないのである。

Notes

* 本稿は2004年7月16日、名古屋大学文系総合館において行われた多元文化研究会において口頭発表した原稿に加筆訂正したものである。

1. 2003年6月ムカジーは三度目の来日、初めて名古屋のアメリカン・センターで講演を行った。そこでのメインテーマは「9.11(同時多発テロ)」の直後、アメリカ政府より執筆を依頼された *Writers on America* についてであった。
2. ムカジーはカナダで様々な人種差別を受けたことを名古屋講演でも語っている。
3. 三部作の邦題は青山南氏訳による『わたしたちはなぜアメリカ人なのか』によった。
4. この段落の *The Holder of the World* に関する考察は、「“A”に見るもう一つのストーリー」(『国際開発フォーラム』2004)で詳しく論じている。
5. ギリシア語 *Rhome* (ローマ), *Rhomaioi* (ローマ人) に対応するローマの『添え名』 *Romaeus* に遡るイタリア起源の男子名。古代末期には(東西の)ローマ帝国の市民を表し、中世後期には『ローマへの巡礼』を、最後には『巡礼』一般を指すに至った。(Duden, *Das grosse Vornamenlexikon*, bearbeitet von Rosa und Volker Kohlheim. Mannheim; Leipzig; Wien; Zuerich: Dudenverlag, 1998. p.240)

Works Cited

- Mukherjee, Bharati. *Leave It to Me*. New York: Alfred A. Knopf, 1997.
- . "On Being an American Writer," *Writers on America*. Office of International Information Programs U.S. Dept. of State: 50-53.
- . "The Way Back," *The Genius of Language*. Ed. Lesser Wendy. New York: Pantheon Books, 2004.
- Schoch, Russell. "A Conversation with Bharati Mukherjee" *California Alumni Association*. Online. (http://www.alumni.berkeley.edu/Alumni/Cal_Monthly/February_2003/QA-_A_conversation_with_Bharati_Mukherjee.asp)
- Stewart, Ian. *Does God Play Dice? — The mathematics of Chaos—*. Massachusetts: Blackwell, 1989.
- 小池理恵. 2004. 「“A”に見るもう一つのストーリー」『国際開発研究フォーラム』26: 27-46.
- スチュアート・イアン. 1998. 『カオスの世界像』須田不二夫・三村和男訳. 白揚社.
- 早瀬博範・吉崎邦子編. 2003. 『21世紀から見るアメリカ文学史 アメリカニズムの変容』英宝社.
- 米国国務省国際情報プログラム局編. 2002. 『わたしたちはなぜアメリカ人なのか』青山南訳. ゆまに書房.
- リドレ・マット. 2004. 『やわらかな遺伝子』中村桂子・斉藤隆央訳. 紀伊国屋書店.